

〈テーマ〉

臨床検査技師の役割について思うこと



松阪市民病院 院長 兼 呼吸器センター長
畑地 治 先生

どんな仕事でも言えることだが、仕事の原動力はモチベーションである。従来、病院における臨床検査技師の業務については、採血などの検体検査が多くをしめていたのではないだろうか。生化学や血算などの検体検査の場合、検体をセットすれば自動的に機械が検査を行い、正常値が決まっているため、解釈に特殊な技能は必要ではなかった。(もちろん精度管理は必要なことではあるが)

松阪市民病院においては、このような検査は全て隣にある医師会検査センターに委託して行っている。このことは、一長一短あるかと思われるが、病院に勤める検査技師の先生方の労力を、他の方面に向けることができるという点では非常に大きなものがある。

個別化医療の高まりにより、従来より検査室開発検査 (LDT:Laboratory Developed Tests) の重要性が急速に高まっている。松阪市民病院においては、次世代シーケンサーを導入し、癌患者に対して 150 のドライバー遺伝子を短期間で測定できる体制を整えた。LDT の品質担保には、現在、世界的には CAP (College of American Pathologists) 認定が最も多くなされている手段だと思われるが、取得は容易でない。特に Liquid biopsy (血液を用いた遺伝子解析) で CAP 認定を取得している施設は日本国内には存在しなかった。品質向上と、検査に携わる医療従事者のモチベーション向上のため、CAP 認定にトライし、取得することが可能であった。この一連の挑戦について、報告させていただく。

一方、臨床検査技師の業務は多岐にわたる。腹部エコーや心エコーなどの超音波検査においては、施術する側の技量により、疾患予防や生命予後が左右されることも少なくは無い。また、松阪市民病院で多く行われる呼吸機能検査についても、施行する側の技量により、結果や再現性が大きく変化する。品質が高い検査結果を提供し続けることがまさに求められ、それが各人の技量に大きく依存するわけである。

臨床検査技師に課せられる役割はますます大きくなっていくと思われる。しかしながら、その反面、ますますやりがいの大きい仕事になり、モチベーションもかき立てられるようになるのではないのかと思うわけである。